



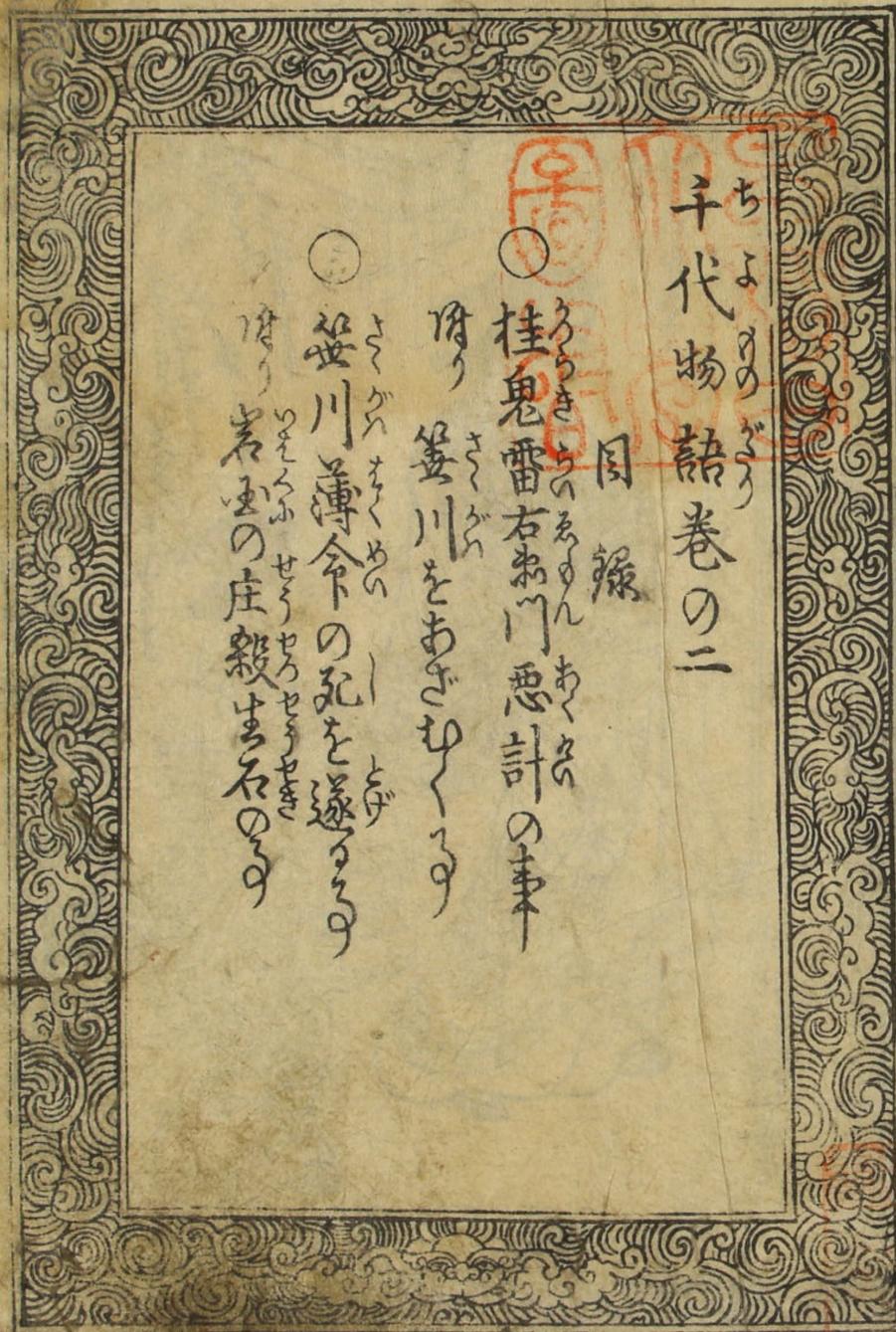
^ 13
3396
2



13
3396
2

新編
柴田上町

小田嶋



ちよりのごう
千代物語 巻の二

目録

- 桂鬼雷右衛門悪計の事
つらきちのあひんあまの
つらきちのあひんあまの
- 釜川をあらわむくろ
さかひ
- 釜川薄命の死を遂ぐる
さかひ
- 岩玉の庄殺生石の事
いそふせうせうせう

三十一
小田嶋
柴田上町



山陽奇談 千代物語 卷之二

東都 鼻山人著

三

桂鬼雷右三門懸針をよむ
附 釜川を欺くもの

其れ切ら成さしと破れ安く時わらえ
其れあひ安しとや當附中國の威風了
伏せざる者あはれが中ふ彼後の國非辺の揚揚
宮内女補忠貞防刻の下知小漁りすあき列の尾子



西川祐信筆

日く不驕奢きやうしやなりて自然しぜん不武ふぶ後あきら妻つま入いれるゆゆ漸ぜんく
 乱らんの端はたとありふりとの頃ころ京師きやうしの王わう法ほういふとの
 争まじぶごとく室所むろ將軍しやうん義輝ぎき公こうも別べつ長なが不ふせをあらは
 天子てんしあ胡この沛はい帝てい位ゐとの費つひ不ふ使しのま手て國こく用ようとさ
 一いっ姓せい大内おほうちけ家けよりあなまで沙さ汰たせられて帝てい位ゐ連れん
 綿わたとて恙やがあれたも倭わあがら大内おほうちけ家けの忠ちゆう勤きんトと睿ゑい意い
 訪まじらざりしうが終つひふは位ゐ階かい昇しやう進しんして日ひのふふ昇しやうが
 ぶくああの始はじめとてまままるの糧いかり勢せきも満みるゆゆのの不ふ女にょ安あく
 義ぎ二に

義ぎ澤たく一いっ遊ゆう一いっ縁えんのの不ふ裁さいられくくのの矢や徳とく下げを
 恨うらむとむむるふふとむむるるいといと兒こ陶隆たうりゆう房ぼうも叙ぎよ舞まく
 尾お比ひ也や時とき時ときと改あらためりが財うへを何なにめとく中なかつら慕がう逢あひ
 心こころであじあじあ知ち賢けん士しのの後あとふ大内おほうちけ家けの末すえふぬぬとぞ
 嘆なげけらるられば桂けい鬼おに雷らい右みぎ門かども陶たうが持も姫ひめ不ふ徳とくつと
 母ははのれがののの不ふ下げをを慮あやりられども行ゆあつて義ぎ澤たくの
 耳みみへへままるる者ものあるるままはは足あ娘むすめもあるる一いっ雷らい右みぎ門かどまで
 美み川がわ源げん心しんが娘むすめ子こ代しろがが女にょ色いろとも不ふ妻つま不ふ徳とく道みちととまま教しやくを

又ておのれが配偶の赤繩を結ると再と再四所
 望しけしほどの心細いさあもういふもあれば桂鬼が
 暮ぬの心てを憎むふもせが刺し我一人の
 女を同せある桂鬼あんどが長妻とまをなす
 候あがら侍士の道をも知り君の爲あの一城をもち
 なる人あらばけ子を配偶て苗字のりをも
 抱のあありされい妻の中の人の娘を嫁するをいゆふ
 多のい史家の家まけを浦をい人の文徳

ふ代二ノと

をも願ふ彼家ま控勢の上を掃り巾を奪ふ
 們あれば虎の威を飯瓶のぶく翌日の危き
 をが知るべからず智ある者の目より見る時
 柳屋まんい水りの山小をりて人をいしと嘲るが
 只おのれを認る賢力をそむび勢威をりて人を
 凌がざるを實の侍士とい謂る一勢のいさ
 あはれ後身のりをも結び納りあるが男よ婿よと
 るともの面目あらんなど却つて桂鬼を嘲りたれば

雷右エ門ハ是より強心を骨 猶不恐之何幸にして
 最不墮ましくそのふあで娘を昔もふのふんきごと且
 其汗汗を与らうるがきなるあつと出らるる
 あれが先陶尾張中時賢を後らひ急で美川
 強心不意根あれが何幸強を最不墮一人とぞ
 縁ありる不意ひあるうあま家の汗へ縁ありひ
 人質の毒毒丸を峰一の程才ありあ由縁あり也
 その汁菓ハ取のどしくと叫きられが時賢も

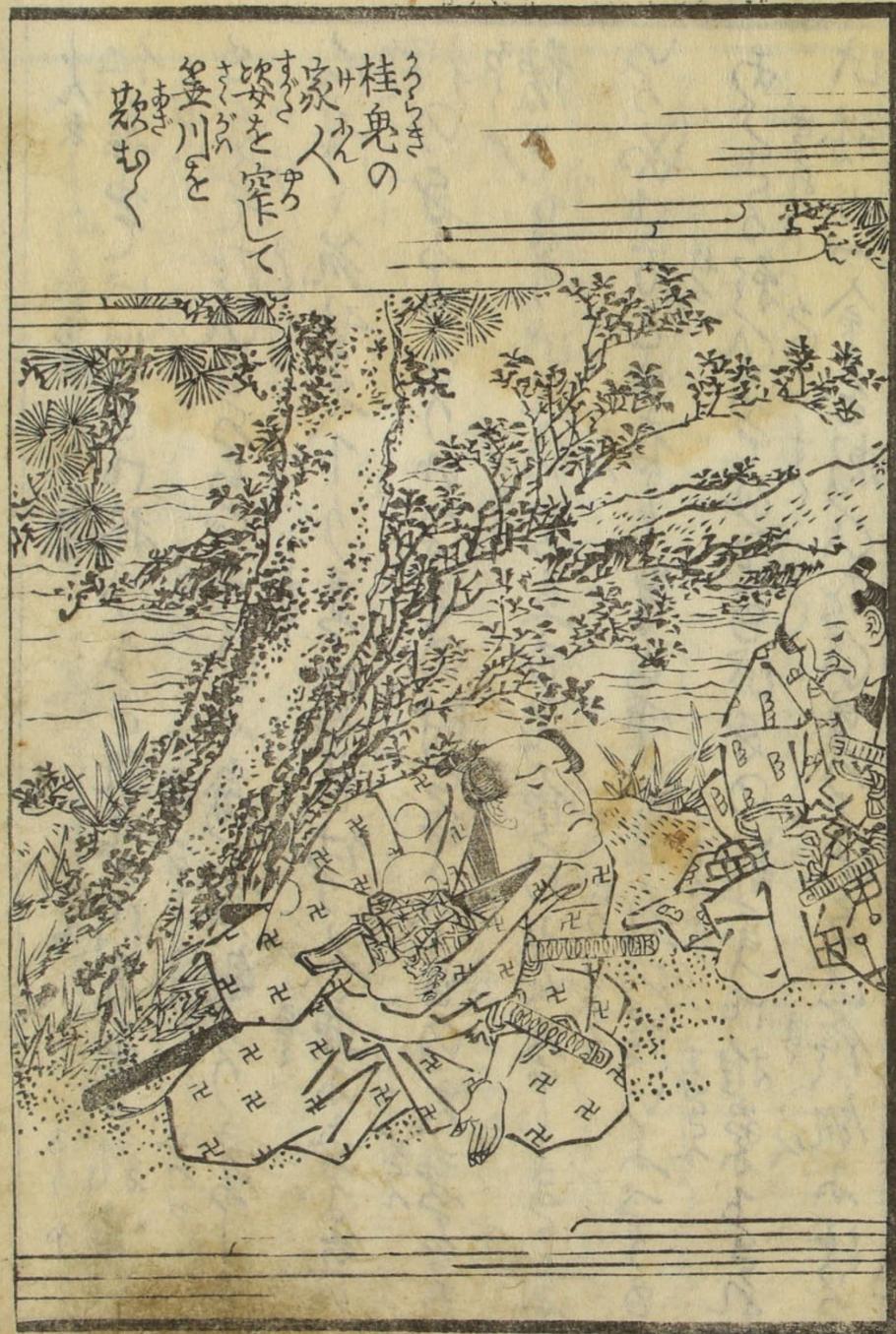
ふ代二四

多く大望あるあまれが結くらけ雷右エ門を一月の
 カともあつむとと押ひらればん委く清合て彼人質
 の毒毒丸を雷右エ門に取テくる取て桂鬼ハ後ん
 の家人不意斗をいひ會ひれが毒丸あり急強して
 毒丸強人のさぬ不意を常し常う不強心が方の根
 子をど何ひくる傷る汗汗ありと夫神あねあの強を
 してある日近村不取拵て毒丸あんでぬらんま
 道の辺ふ一人の浪士強あなるの強あて強く二也

ちりある嬰児を懐中お抱き志願くとくま
 身強心が中筋の神をむくく懐くまきいりま
 殿へ車お出願ひゆるのゆに次たれじし
 強心馬より下りてらぬ者おて軽ひとらぬるごと
 同くれば浪人のまよ行ひを突て出だひと申し
 美おあづぶ某の浪人あてゆが身後の
 大友家へお縁あつては見か母を侍るひ親子文
 身すづらふ立いで激くは地までまじが妻あゆ

ふせ二ノ五

老俄うみいりるのまきと日し氣お守りくありてゆ
 和りくゆどのあふ一姓の用意あるれが死骸をが世外
 お摺りけ子を某へ懐中お入道九列まで紙ゆらんお
 乳下おあつてまかうのあつてはあて進退脱お谷
 てゆを是れおく刺殺し捨んとおのひ切てのまら
 馬ぬえすが思おの寧ろあり今期よりまは
 いめて免やせぬ角やせぬと思案のらち測むも
 殿の通うをえ懸ちりけ形ひ中上八何卒君の



時めどしく再命結まぐと若堂お命じて伴の
小見を拍子と置ぐ浪人舟の跡をよす歌まで指
付ける由形ひを速く小義ありあつるゆゑ
び子が天運のさきかゝるおまじ世に古厚君を思
なるとまじはしと解かしては別々を思ひ好しと
思ふは是れは別々までのまじ思ひ違ひは流の程
は小先ものせれと儲り小先ひおもひまじはし
尚分飢を清くま用意あつてはしはまじはし

百代二八

甘がすし者あつら書達の用おまじはしと合子
とあまやとあまはれ浪人の程もあまじして小見か
一命を救ひぬるの程もあまじはし用まであつらるひ
いふての程もあまじはし小見さ入る程も
ぬるるの程もあまじはし如銀鏡幸甚とて入
物むてもの目の飢ひぬるるは合子入る載せしめ
あつるるあつるその程もあまじはし下島管轄道と
押さへる尚時あつる後の大友家と大内家合夥



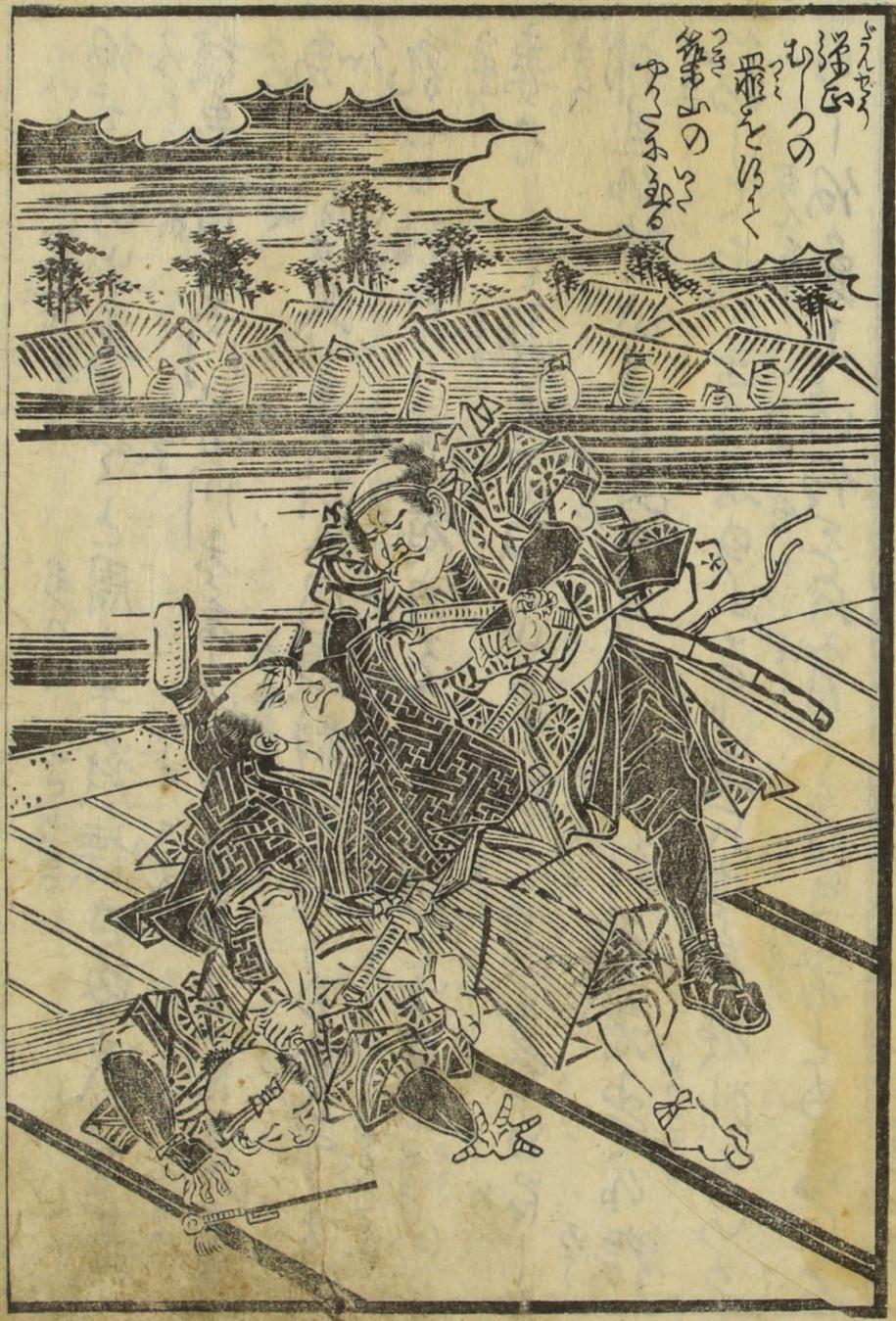
容易あつざる歌國の人受りつる歌乱まの増
 とのあらうとせんとしむれば海えおおのびゆと大
 息結ぐやうあぞ我降たまふお尋りてはしる
 一たよりあつる春ひるのしほもいふはしる
 速くふき舞のそ配して一時を中へ擧ぐ
 せしくお中知しむる番路物取の面へ逃く
 人殺を繰りし業を二分てむ尋ねくる係りた歌
 へく桂鬼雷右工門の築山の如形へ馳参りて徳め

〆代二十

山尋ねありけり掲東家の人受り春寿丸が
 釜川源にが方お尋ねしむる懐ふさけあり
 布ゆぬしむれば宿おを山尋ねゆりやと中
 くれがけを移さる向のべしとてまき赤中平室
 田長とまふふ知しと強心が宿へ強向ひ
 有無の返言を待ばして釜川が一族を捕来る
 又雷右工門芥川と帝政権保はあへ人受り
 春丸と春集ひてしむるを命せらるれば田士

長まうまうを物もな放す釜川が宿所へ
 向ひ多毒中室因へきびくきかして
 人を二ひふ分裏口表口より又くと
 の物あるをいひつぐふ在と
 押のひうけぬるのさるれば
 をくろめて立出つをぬえ
 へ替りごととせも
 ぶふて花がごとくふ立おれば
 家内の上トコハく

あて土



釜川の
 宿所の
 向ひ多毒
 中室因へ

